

が京都帝国大学に在ては、夙に確立せる制度運用上の規律とす。吾人は今回の事件に付て新に之を主張するには非ざるなり。然るに、今回の滝川教授の休職は、総長の具状なく、且毫も教授会の同意を得るの手續存することなくして、行はれたり。此の如きは、実に我が京都帝国大学に在て、研究の自由を確保する方法として、夙に公に認められ、且久しく遵守し来れる規律を破壊し、以て大学の使命の遂行を阻碍するものとす。是れ吾人をして辞職するの己むなきに至らしめたる理由の二なり。

吾人不敏なりと雖職責の重ずべく、又進退の大学の内外に影響する所大にして、妄にすべからざることを知れり、然れども、今や吾人が職責を尽し得るの根本要件たる研究の自由既に認められず、国家が吾人に命ずる所の職責を誠実に尽すこと能はざるに至る。吾人の辞表を決するに至れるは、実に万已むことを得ざるに出づるなり。

昭和8年5月26日

京都帝国大学法学部教授一同

(七人共編「京大事件」387頁以下附録A)

スペインを一人旅して

渡 辺 栄太郎

1. マドリッド

昨、昭和63年の7月に、私の主要研究の対象になっているイギリスの詩人・文芸批評家、社会哲学者でもあるマシュー・アーノルドの没後100年記念会議がリバプール大学で行われ、その参加後に単独で、スペインとフランスを周遊してみた。この稿では、法学研究所長吉岡先生からお声が掛かったのを機に、少しくスペインでの印象を語ってみることにしました。私にはずっと若い頃から、自分たちに最も遠くて、異国的と思われるリオ・デ・ジャネイロやブエノス・アイレスを見てみたいという想いがあった。その意味で、先回の渡欧には、中南米文化の源となったスペインをこの際訪問しておきたいというのが、この旅行の第一の動機であったと考える。

イギリスでも数十年ぶりと言われた昨年夏の寒い悪天候を脱出して、ロンドン・ヒースローから、ブリテッシ・エアで抜けるような青空と乾燥した暑さのマドリッド（現地語ではマドリットと発音する）に着いたのは、8月5日金曜日の午後であった。バラハス空港の構内でトラベラー・チェックの一部をスペイン・ペセタに換え、マドリッド中心部までタクシー

をとばした。後で知ったことだが、空港からはメーター以上の料金をとられることになっており、1,200ペセタだった。車窓から初めて見るマドリードの大通りの建物、中央郵便局などが、今まで見知っていたイギリスや、フランスなど西欧諸国の様式とも異り、いかにも壮大に堂々と眼に映ったのを覚えている。ホテルに着き、一応持物や身の整理をすませ、夕刻まで近辺の繁華街を歩いてみた。ホテルは「アロサ」(Hotel Arosa)とあって、東京の銀座通りに当るグラン・ビア(Gran Via)の丁度真中に近い賑やかな場所にあった。なだらかな坂を下り、西のはずれで‘Plaza de España’と標示してある地下鉄の入口まで達したが、夕方のことでもあり、この広場が何を意味するかも知らずにホテルへ戻ってきた。大通りに面したテラスには市民が多勢憩っていて、パリのカフェと同じ恰好の陽気な賑わいである。夜、ホテルの部屋の窓から見るマドリード市の街の灯は、遠く近く、幾つかの色に輝いてはまたたき、南欧真夏の濃紺の夜空の星と対応して、誠に印象的であった。

翌6日は土曜日、九州新日鉄の社員という人達と朝食が一緒になった。事業指導に来ていたとの事だが、スペイン人は他の国と違ってこすからい事をしないから、安心して指導できるという話を聞く。日本を出発する前日、大急ぎで買ったトラベラー・チェックについて、市中銀行での計算が明らかに間違っているのを知り、暗然とする。(後日帰国してから、証拠突きつけて損害分を取り返した。このたび、銀行だからといって頭から信用してかかる危険を、初めて知った。)

ブルマントゥールという市内観光バスに乗ってみる。スペイン広場からマドリード大学、王宮や大公園それに闘牛場などを巡ったが、最初、何が何やら判らなかつた。大学には中南米諸国からの留学生が多いとのことで、さすがスペイン語の宗主国だと思わされた。因みに、車内に同席したのはリオ・デ・ジャネイロからの紳士である。(ブラジルはポルトガル語だが、彼はスペイン語が判るようだ。)旧市街を通った時など、無敵艦隊アルマーダがネルソンに破れるまで、16,7世紀を中心に最盛を極めた国だという思いが、頭をかすめる。案内人はスペイン語・フランス語・英語などで説明するのだが、たまたま乗り合わせた2人の韓国人の1人、保険業で来たという白さんが英語で話しかけて来て、ビールをおごられたりして、結好面白かった。

夕刻、彼ら2人と一緒にフラメンコ・ツアーに参加することにした。ホテルのレセプション以外、まず英語は一切通用しないので心強い。夜9時過ぎにバスの出発点に集まり、‘Sanbra’という劇場に入った。踊りの始まる前に食事が配られ——といっても赤ワインと少しのパン、それにビフテキという簡単なものだが、実は私と向かい合って座ったのが、たまたま、華やかな若い女性であった。目と目を突き合わせて一言も口をきかないのは心苦しい。隣にはお母さんらしい人、反対の席に叔母さまかと思われる人が座っている。まず

お母さんに向かって、娘をほめることから始めた。“¡Perdon! Ésta es buena señorita.” 素敵なお娘さんですねの意味だが、忽ち“¡Gracias, muchas gracias, gracias!”と何でも娘からお礼の言葉が返ってきた。実はここ数年、リングフォンなどで通勤電車の中などスペイン語を独習してきたのだったが、こう言われると、とたんに興がはつむものである。濃い空色のドレス、大きなイヤリングに長い髪、華やかな顔立ち、一体どこの国籍だろうと思って聞いてみた。

“¿Qué es la notionalité de usted?” 実は、‘nacionalidad’ と言うべき所をフランス語と混同してしまったのだが、判ってはくれた。だが肝じんのその答が他の人達の話し声に混って聞きとれない。そこで、も一度きいてみたがやはり駄目だった。それでこれは、僕の聞きなれていない中南米の小国だなどと判断した。こうして幾つかの会話をやりとりしている中、彼女はニュー・ヨークに住む女子学生だと知り、以後英語に切り換えてホッとしたものである。私との対話の内容を、彼女は一いちスペイン語で母に説明していた。隣席の白さんは、僕がスペイン語を話せるのかと感心した様子だった。下手上手は別として、全く異国の人と話を通じ合うというのは、まこと外国旅行ならではの面白さだと思った。10時半頃からフラメンコ・ダンスが始まる。まずは10人程の女ダンサーが集団で踊り、2, 3人の男ギタリストと音楽手、歌手アナウンサーが居て、実に騒ぞうしくも華麗で楽しくはあったが、何よりもその迫力には圧倒された。でもその賑やかなメロディーの底に、何か哀愁の流れがあるのに気づく。続いてソロ・ダンス。「クククルク・パロマ」の歌唱なども入っていた。魅惑的な黒いドレスの踊り子がいて、終演間際にわざわざセクシーなポーズをとっていたが、あれは男性客のための営業サービスなのだろう。フィルムが尽きたのを、僕はカメラの電池が切れたものと、暗さの中で早合点していたのは情ない。

2. トレドから再びマドリッドへ

7日日曜、晴れ。午前中ちょっと近所のデパート El Corte Inglés に入ってみる。午後、トレド行き半日バス旅行。新しい大型バスで、観光客は50人を超えていただろう。勿論日本人は私1人。英語を話す人は他に1人も居なかったようだ。トレドはマドリッドから南西70キロ程の所にあり、途中、一休止して2時間近くもかかったろうか。タホ川に囲まれた丘の城壁に守られた街で、雨が少いせいか、途中樹木がまばらで岩石ばかりが目立った。古い歴史の煉瓦の家並みで、11, 2世紀の建物もある。幾つかの寺院を回ったが石造り、コンクリート、ステンド・グラスなどで、ロマネスクとかゴシック調といったところ。そしてすべてが中世のキリスト教だ。16世紀の中葉過ぎまでスペインの首都であつたらしく、当時いかにキリスト教が人間生活を強く支配していたかを感じさせられる思いであつた。この町はスペ

イン内戦で、ヘミングウェイらが立て籠ったことでも知られている。

8日月曜、晴。有名なドン・キホーテとサンチョ・パンサの銅像のあるスペイン広場や、Puerta del Sol（太陽の門を意味する下町の中心地）には既に何度か足を運んだので、本日は逆に Gran Via 通りから東の方を歩いてみることにする。Museo Prado（プラド美術館）が月曜休館だと知らされてがっかりした。大通りに出ると日中は暑く乾燥しているので、すぐ喉がかわく。グラン・ビアからアルカラ通りに入り、シベレス広場の中央郵便局に入ってみた。それから交叉する大通りを北上してコロン広場に着き、パークレイ銀行を見つけたのでチェックを現金に換えようと思った。それらしい窓口がないので制服の若い守衛に尋ねたら、外国為替・両替などは通りを隔てた所にあると教えてくれた。そのお礼をいうのに‘Gracias’の一言が思い浮かばず、とっさに使い慣れた“Thank you; Merci; ありがとう!”と3連発したのは、我れながらおかしくなってしまった。彼も笑っていたが、まさに一人旅の面白さと醍醐味は、こんな所にもあるものかと思ったものである。\$200 換金して24,000 pst. 強である。もどって来てアルカラ門、カスティーヨ広場、ここの木陰のカフェでビールを飲む。ここからプエルタ・デル・ソルに向かう途中にスペイン国会議事堂があり、入口の左右にライオンの像を配した白亜の建物だが、さほど大きくもなく、他に沢山立派な建物を見ている僕にとって、特に威厳は感じられなかった。一担プエルタ・デル・ソルに出て、アルカラ通りを経、ホテルの自室に帰る。明日の出立にそなえ、お金や荷物の整理をしたら、午後6時を過ぎてしまった。幸い隣りのデパート Balefas Preciados はあいていて、マドリッド最後の買物をする。

もう夜も9時になるが、まだ明かるい。ホテルのフロントから紹介を受け、スペインの代表料理パエリヤ(中南米式だとパエジャと呼ばれる、海産物と煮込んだ米料理)を食べに行く。グラン・ビア大通りは人や車で賑わっていたが、これを横切ってホテルの向かい側の裏通りに入ると、何となく汚れていて人影一つない。一瞬こんな所を襲われたら、行方不明になることもあるんだろうという危惧が頭をよぎる。不安な2,3分を過ぎて、‘La Barraca’という看板を見付けてホッとす。中に入ってみると30歳台中ばに近いと思われる女性が受け付けに居て、私に見慣れぬ東洋人の1人姿に怪訝な顔をしていた。“¿Éste es paella restaurante?”と言ったら表情がパッと変わって内部へ案内される。部屋には幾つもの円テーブルが並べられ、地元の家族づれや中南米かイタリー辺りの客人ばかりだと思った。こまかいメニューは忘れたが、先ずはビール(cerveza)、ついで sopa(スープ)に小さな pan(パン)、ensalada(サラダ)と続き、肝腎のパエリヤは、おなか一杯でお代わりに応じられなかった。えび・かに・貝・魚・肉少々に野菜の煮込み御飯で、春に東京六本木の「ビードロ」という家で家内と一しょに食べたものより、如何にも重厚な本場の味だったと記憶する。給仕をするカマ

レロ（給仕人）にお世辞も込めて“Deliciosa, muy bien”を連発する。別注文のフルーツ（fruta）はかなり遅れて出てきたが、大皿にリンゴ・梨・バナナ・オレンジ・桃など8種類程に及び、僕には楽に食べられるイチゴとチェリー、それに葡萄までが限度だった。記念に写真をとってもらおう。“Vamos a ver en Tokyo con usted.”（東京でお会いしたいものです）。親切だったボーイに喜んでもらおうと精一杯のお世辞を言ったつもりで、初歩的な表現ではあるが、我れながらよく言葉が出てくるものだと感心した。代金は2,500 pst.と少々。本場のパエリアを食べたというだけでなく、今でも素晴らしい体験だったと思う。唯一の失点はプラド美術館を見逃したことであった。午前1時を少し廻る。南国の夜は、通りからまだざわめきが聞こえる。浴室の窓から見る街の赤い灯は十文字に輝き、遠い無数の灯火と黒い尖塔、照らされて白く輝く近くの建物、青灰色の空には星が一つ、ひととき大きく煌いて見えた。

3. バルセロナ

10時55分バラハス空港発に間に合うよう7時過ぎに起き、朝食は少なめにしてお荷を整えた。支払いは予想したより多く、100ドル・チェックを3枚切り出し、残りを現金で埋める。ホテルからタクシーをとばし、30分程余裕があって空港に着いた。イベリア航空、ゲートが表示された番号と異っていて不安だったが、何度も確認して搭乗する。1時間ほどでバルセロナ着。前の人達の後について行ったら、また荷物の検査を受ける。通過してからおかしいと気付いて戻り、航空券・パスポートを見せて、やっと係員に出口を教えてもらう。でもあわてなかったのは良い。タクシーで Hotel Colon へ。かなり遠い。大きな古いカテドラルの真前で、部屋は余りきれいな感じはしなかった。一安心して、しばしベッドに横になる。

地図を見て、近くに広場（Plaza de Catalunya）があるのを確かめ、後もどって反対側に海があるようなので行ってみる。初めて見る地中海だ。なつかしい潮風が吹いていて、この海は故国とつながっているような気がした。コロンブスの船の模擬船とか、昔の西洋のガレー船か何かの面影を持つ帆船が岸壁に繋がっていた。海岸広場ではコロンブスの立像が高い塔の上にたち、海の彼方を指さしている。往時のこの港の繁栄を記念するものであろう。ホテル・レストランでの夕食。スペイン語リングフォンで聞き覚えたものを注文したら、一寸変わったスープに酸味の軽い料理、それに厚いステーキに味わったことのないソースのついたものが出された。カマレロ頭のおじさんが、「おいしい」、「さよなら」の日本語を話していたのは面白い。

10日水曜、晴。ホテルで朝9時半の市内観光バスを待つ。まずホテル真前の Avinguda Catedral の内部を参観、13世紀末の創建だそうで、シュロの木と噴水のある薄暗い中庭に生えた竹は、東洋を連想させて、いやに印象的であった。港湾道路を通過して、市全体を眺望

できる公園台地に登る。つづいて大円形競技場が工事中なのを見て、バルセロナが1988年のソウル・オリンピックにつぐ開催地であることを知った。庭園内を巨人や頭でっかちの人形がのし歩く行事も面白かった。同行したイタリア人家族の若い娘の白いドレスが、南国の陽にはえてまばゆい。解散して目印のカタルーニア広場に出、一たんホテルに戻る。実は特異な尖塔で有名な Sagrada Família 寺院を見たいというのが、バルセロナ訪問の第一の目的だったのである。観光バスでは回らなかったの、ホテルの親切な受け付けの人に聞いて、歩いて行ってみることにした。30分程も北東部へと幾つもの街路をよぎり、空間にそびえる特徴のある4本の塔を見た時、成程、一瞬まさに、来た甲斐があったと思って感動する。あらかたは近世スペインの建築史に輝く巨星、その強烈な個性で世界に名声を博したアントニオ・ガウディに依る作品で、前世紀から始まって、完成まで3百年以上もかかるという。前後合計8本の塔があり、そのうち入口から後方の4本が訪問客に公開されていた。高い方の真中の2本の塔の頂上まで登ってみる。長い間の一つの希望がかなえられる感じであった。思う存分このサグラダ・ファミリアの塔に登り歩き、細いらせん状階段を上下する。帰途はメトロを利用してカタルーニア広場に出た。

広場から南の港に向かって、ランブラ (Las Ramblas) という賑やかな街路樹の茂る繁華街がある。ここを港に向かって少し行った所の右側に、奥の深い大きな市場がある。魚・肉・野菜・果物など何でも安い。レストランでとる夕食費を節約のため、僕はここで数回買物をした。魚屋のおかみさんが、“¿Qué desea comprar?” (何を買いたいですか) と傍を通るお客に呼びかけていた。その控え目な声には、何処となく詩情をかき立てられる思いがしたのを覚えている。好きな葡萄を2種類ビニール袋に一ぱい買っても、日本円にして100円にもならないと思った。恐らく、日本の旬の季節の10分の1の値段にもならないのではないか。ホテルの自室の冷蔵庫に入れてよく食べたが、味は大味だ。プラム・いちごなども買ってみたが、日本のものより美味しいという感じはしなかった。街の出店の Cambio で換金する。確かにホテルよりは安いと思った。就寝は大抵1時頃になってしまう。

8月11日木曜、晴。

今朝はバルセロナから地中海沿いにフランスのマルセイユまで汽車で行くつもりだったが、セルビエールという所で乗りかえ、朝と夕の2本しかない例のレセプションに教えられる。もう既に朝の1本は出発済みで止むを得ず断念、マルセイユのホテルをキャンセルして、直接パリへ航空機で行く手配を頼んだ。仕事でしてくれることとはいえ、係の人の親切に心から感謝の気持を覚えた。地図で見ると簡単なようだが、外国では、特に国境を越えることでもあり、そうた易いことではないのを思い知った。

一泊延期したので、Barcelo Neta という市内の海水浴場にタクシーで行ってみた。海水浴

客の込む砂浜を歩くのは遠慮されたが、焼けつくような暑さの下、本質的には日本と変わらない印象であった。アフリカ式に細く編み上げた髪形の女性などもいたりして、多少は人間の風情も違っていただろうか。

夕方、改めてバルセロナのフラメンコ・ツアーに参加する。日本人はおろか、東洋人は僕1人。場所は先程のランブラ通りにある劇場で、マドリッドの「サンブラ」より一廻り狭く、踊り子の数も2、3人少なかった。真横の席で舞台全体は見えなかったが、代わりに大写真の写りがとれる。同席した近くの観客の中に、その4年ほどまえ、ロンドンの大英博物館で見たエーゲ文明の壺絵にあるような、目の大きな女性たちの居るのに気付いた。恐らく、その人種の縁類を示すものなのだろう。顔立ちは細い柳眉で美しいが、おしなべて太り気味である。でも終始にこやかで、あいそは良さそうだった。ショーがひけて人混みの中で帰りのバスを見失ったが、付近を知り尽くしているので楽にホテルに帰着する。途中の広場では真夜中だというのに、若者でゴった返していた。バスで劇場に着くまえ、一担立ち寄った市内レストランでのバイキング料理はとても豪華だった。はさみのついたえびや、かになど、実に充実した海産物中心のもので、種類も量もふんだんであった。入浴もせず、床に就く。

明るく12日、10時15分のエール・フランス便に間に合うようホテルを立つ。ポーターは丁寧に別れの挨拶を送ってくれた。運転手のじいさんは、日本人は頭がいいなどと言っているようだった。少しチップが足りないと言われる。確認を重ね、大きな携帯バッグを肩からはづして別荷で乗せる。機内では途中、気のきいた紙箱に入った菓子を配られる。さすがにエール・フランスだと思う。2時間半程かかったが、少し眠ったらしい。眼下にパリの市街地を流れるセーヌ川が見えてきた。

スペインは1977年E Cに加盟を果たし、現在ヨーロッパ諸国の中でも抜群の経済成長率で注目を浴びている。私が滞留したのは僅か10日に満たず、訪れた場所も首都のある中央部と東部地中海地方に限られるが、その印象は極めて陽性で、人びとには活気があった。1992年にはE Cの市場統合を迎えるが、そう遠くない未来に、他の西欧先進国に経済力が追いつくことも考えられよう。しかもその文化は中世以来の古い伝統を保ちつつ、現代の産業社会に脱皮しようとしているようだ。同じく1992年のバルセロナ・オリンピックも、その重要なバネとして登場してくるであろう。勿論、私のこの初めてのスペイン旅行は、自分の眼を見開く素晴らしい経験となっただけでなく、これからの中南米を含めての米州文化の理解にも、大きく役立ってくれるものと思う。マドリッド、バルセロナの空は飽くまで青く、深く、一点の曇りもなく澄み切っていた。(1989・2・28)